

Śāṅkara における bhakti の upāsana 的解釈

吉 田 健 翁

0

bhakti が upāsana であるということを, Rāmānuja は Gitābhāṣya など
明言している¹⁾。Śāṅkara 派でも, 後代では bhakti を自己の本質の探求と定義
したり²⁾, upāsana とは少し性格が違うものの, nididhyāsana と bhakti とを
同一視する説が見られる³⁾。本稿の目的は, Śāṅkara の Bhagavadgītā 註 (Gbh)
の中に上記の説の萌芽を見出そうとするものである。第一に upāsana と bhakti
の定義を見て, 次に両者の解脱の手段としての位置付けを比べる。

1

Śāṅkara は, Gbh の中で「upāsana とは, 聖典にしたがって upās されるべ
き対象 (upāsyārtha) を対象とすることによって近付き, 油が流れるような同一
の観念の継続によって長時間座すこと, それが upāsana であると言われる」と
定義する⁴⁾。また, 他の箇所では upāsate を「信をもって思念する (cintayanti)」
と語釈している⁵⁾。Brahmasūtra 註 (BSbh) にも前者と同様のものが見られ⁶⁾,
upāsana は一つの対象に精神を集中することで, 念想と訳される。また, BSbh
の他の箇所では「さらにまた, upāsana や nididhyāsana として, 反復を属性
とする行為が述べられている」⁷⁾と, 行為であると定義している。

一方, bhakti や動詞 √bhaj には特に定義が与えられず, それぞれ, bhajana,
√sev と同義語で説明されているのみである⁸⁾。語釈に挙げられたこれらの語は,
「崇拜」, 「奉仕する・崇拜する」という程の意味であるが, しかし, bhakti は
Gitā の中で「他心のない (ananya)」、 「不動の (avyabhicāriṇi)」と形容されてい
る通り⁹⁾, 本来対象への専心という傾向が強いものである。二つの術語は同義語
とみなされ得る素地をもっていると言える。しかし, Śāṅkara は, これを以て
bhakti を upāsana の同義語であるという解釈はしていない。ただ, Gitā II-14
「bhakti によって私を礼拝し, 常に専心して念想する」, XII-1「貴方を念想する

bhakta たち」と言っているのにしたがって、upāsana する人を bhakta と言っていることがある¹⁰⁾。

以上、語義の上では、Śāṅkara に bhakti と upāsana を結び付けようという明瞭な意図は見られない。

2

Gbh において、bhakti には二種類の解釈が見られる。解脱の手段としての位置では行為の内に含まれる bhakti と、Īśvara=ātman という知識を特徴とする bhakti と説明されるものとである。ここでは、bhakti を伴う行為から心の浄化、知識の獲得、あらゆる行為の放棄、知識の立場¹¹⁾ という解脱への階梯が形成されている。しかも、ātman を対象としている bhakti は、行為のように知識と対立して放棄されるものではなく、この階梯の中で知識と並立しているように解釈されている¹²⁾。

一方、BSbh では、upāsana の実修から漸進解脱が得られると説いている。これは、有属性の brahman を対象とし、死後 devayāna を通って結果としての brahman (低い brahman) に達する¹³⁾。そして、その brahman 界が消滅する時に、完全に清浄な Viṣṇu の最高の境地 (parisuddhaṃ viṣṇoḥ paramaṃ padam) に入る¹⁴⁾。この Viṣṇu の最高の境地というのは、Gbh の中で、bhakti から得られる Īśvara による恩寵でも説かれている¹⁵⁾。

Kaṭa-Upaniṣad III-9 にもこの言葉があり、Śāṅkara が何をもとに漸進解脱の最終点を Viṣṇu の最高の境地と言ったかは不明であるが、以上のところ、bhakti も upāsana も終着点が同じに見られる。

しかし、途中経過が大きく異なっている。bhakti は、行為から知識へという解脱への実践的階梯の中で述べられ、devayāna とは関係がない。故に、段階を経て解脱に至るという点で、upāsana の漸進解脱と bhakti の解脱への階梯とを比べるのは、不適切であろう。

3

先に、漸進解脱を生じる upāsana の対象を有属性の brahman と述べたが、Gbh では第12章を中心に、顕現した可滅の Īśvara を対象とする upāsana と、非顕現不滅の brahman とを対象とする二つの upāsana とが説かれている¹⁶⁾。

ここで、Īśvara への bhakti は、顕現した可滅のものを対象とする upāsana

と位置付けられている。ただし、これは先に述べた行為の内に含まれる bhakti のことを言っていると考えられる。XII-13 への註では、ātman と Īśvara の別異に基づく Īśvara への心の集中に対比して、不滅のものを対象とする upāsana は、karma-yoga ではないと言われている¹⁷⁾。Īśvara=ātman の知識を特徴とする bhakti は、これに当たるとなろう。

さて、BSbh で upāsana が行為と定義され、知識を得た後には必要のないものとされているにもかかわらず、Gbh では、非顕現不滅のものを対象とするものは、karma-yoga ではなく、また、「正しく直観している (saṃyagdarśin)」、第一義を直観している (paramārthadarśin) あるいは、ātman と Īśvara の不異という「正しい直観を立場とする (saṃyagdarśananiṣṭha)」などと解釈されている¹⁸⁾。つまり、知識と同等と説かれている。

ここで、既述の bhakti の二種類との類似が見られるが、ただ、この二種類の upāsana は、対象と方法を異にする個別のものとして捉らえられており、bhakti の様な階梯をあてはめようとはされていないようである。

しかし、行為と知識との両方に跨がる bhakti と、行為と定義されながら Gbh では知識と同じく説かれる upāsana との、解脱の手段としての位置付けの類似は、後代の bhakti の upāsana や nididhyāsana との同一視に発展するものと考えられる。

1) 松本照敬『ラーマースジャの研究』p. 63-77.

2) Vivekacūḍāmaṇi 32.

3) 同偈 Candraśekhara bhārati による註。cf. 澤井義次「信仰の概念と現実——シャンカラ・ヴェーダーンタ派の研究序説」『宗教研究』59, 1985, p. 36. 11. 1-5. Śaṅkara にあっては、upāsana と nididhyāsana は同義に扱われている。cf. 中村元『シャンカラの思想』p. 659, 1. 9. しかし、Sureśvara は Śaṅkara が upāsana と同義に解している dhyāna と nididhyāsana とを別に解釈している。cf. 日野紹運「Sureśvara に於ける nididhyāsana について」『印仏研』29-2, pp. 164-165. Madhusūdana Sarasvatī の解脱への階梯論は、Sureśvara のそれに従っている。cf. 日野紹運「ヒンドゥーの宗教世界——不二一元論学派学匠マドゥスーダナ・サラスヴァティのバクティ観をめぐって」『Sambhāṣā』6, 1985, p. 27. 1. 29.

4) Śaṅkara's Bhagavadgītābhāṣya (Ānandāśrama Sanskrit Series 34) p. 173. 11. 6-7.

5) ibid. p. 200. 11. 9-10.

6) Śaṅkara't Brahmasūtrabhāṣya (Ānandāśrama Sanskrit Series 21- I, II) p. 480. 1. 5.

- 7) *ibid.* p. 458. 1. 12-p. 459. 1. 1.
 - 8) *Gbh.* p. 123. 11. 12-13, p. 189. 1. 27, p. 213. 1. 7, p. 263. 11. 22-23, p. 267. 1. 13, p. 111. 1. 2, p. 115. 1. 22, p. 135. 11. 4-5, p. 141. 1. 6, p. 144. 11. 4-5, p. 144. 11. 18-19.
 - 9) *Gītā* VIII-22, XI-54; XIII-10.
 - 10) *Gbh.* p. 138. 1. 2, p. 172. 1. 23.
 - 11) *jñānaniṣṭhā*, 下記の稿では、「知識の状態」と訳したが、*Gītā* III-3. に説かれる二種の立場 (*niṣṭhā*) の内の「*jñāna-yoga* による *sāṃkhya* の」立場を指していると考えられることから、訳を改めた。
 - 12) 拙稿「Śaṅkara の思想における bhakti の意義——特に *Bhagavadgītābhāṣya* を中心として」『印仏研』41-2, pp. 122-124.
 - 13) *BSbh* IV-3-1~3, 6~7.
 - 14) *BSbh* II. p. 536. 11. 10-11.
 - 15) *Gbh.* p. 106. 11. 7-8, p. 123. 11. 15-16, p. 365. 11. 7-8, p. 266. 11. 22-23.
 - 16) *ibid.* p. 172. 11. 1-16.
 - 17) *ibid.* p. 176. 11. 5-7.
 - 18) *ibid.* p. 172. 1. 18, p. 173. 1. 16, p. 176. 1. 14, p. 179. 1. 2.
- 〈キーワード〉 Śaṅkara, bhakti, upāsana

(東洋大学大学院)

会則改定のお知らせ

本年度学術大会会員総会においてお知らせしました通り、平成5年5月22日の評議員会で会則が改定されております。会員諸氏のご協力をお願いいたします。

日本印度学仏教学会